5月3日第1主日礼拝　列王記第一9章1－3節　説教「神への信仰」
今日はⅠ列王記9章から「神への信仰」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。
1. 全き心　1－9
1-3【1 ソロモンが、主の宮と王宮、および、ソロモンが造りたいと望んでいたすべてのものを完成させたとき、2 主は、かつてギブオンで現れたときのように、ソロモンに再び現れた。3 主は彼に言われた。「あなたがわたしの前で願った祈りと願いをわたしは聞いた。わたしは、あなたがわたしの名をとこしえに置くために建てたこの宮を聖別した。わたしの目と心は、いつもそこにある。」】ソロモンが神殿と宮殿を 20 年かけて完成させ、神殿奉献式を行った後のことです。神はかつてギブオンでソロモンに現れた時のように、再びソロモンに現れました。神は8章でのソロモンの神殿奉献の祈りに応えて、「あなたがわたしの前で願った祈りと願いをわたしは聞いた」と言われました。そして、ソロモンが建てた神殿を聖別し、神の目と心はいつもそこにあると約束されました。神は神殿に神の名を置かれます。それは、神殿に神が臨在され、神殿に向かって祈る祈りを、神の目と心をもって聞くということです。このように、神はソロモンが建てた神殿を喜び、祝福されました。
一方、4－10節は、神殿という建物よりも、もっと大切な信仰について語られます。4－5は祝福についてです。
4-5【4「もしあなたが、あなたの父ダビデが歩んだように、全き心と正直さをもってわたしの前に歩み、わたしがあなたに命じたことすべてをそのまま実行し、わたしの掟と定めを守るなら、5 わたしが、あなたの父ダビデに『あなたには、イスラエルの王座から人が断たれることはない』と約束したとおり、あなたの王国の王座をイスラエルの上にとこしえに立たせよう。」】全き心とは、神への全き信頼の心です。正直さとは、罪を犯したときには、神の前に正直に罪を告白し、悔い改めて正しい道に戻ることです。ダビデはそのような信仰者でした。もしソロモンがダビデのように、心から主に信頼し、正直に罪を悔い改め、主の教えに従って生きるなら、神はダビデ家から王が絶えることがないと約束されました。次に6－9はさばきの警告です。
6-9【6「もし、あなたがたとあなたがたの子孫が、わたしに背を向けて離れ、あなたがたの前に置いたわたしの命令とわたしの掟を守らずに、行ってほかの神々に仕え、それを拝むなら、7 わたしは彼らに与えた地の面からイスラエルを断ち切り、わたしがわたしの名のために聖別した宮をわたしの前から投げ捨てる。イスラエルは、すべての民の間で物笑いの種となり、嘲りの的となる。8 この宮は廃墟となり、そのそばを通り過ぎる者はみな驚き恐れてささやき、『何のために、主はこの地とこの宮に、このような仕打ちをされたのだろう』と言う。9 人々は、『彼らは、エジプトの地から自分たちの先祖を導き出した彼らの神、主を捨ててほかの神々に頼り、それを拝み、それに仕えた。そのため主はこのすべてのわざわいを彼らに下されたのだ』と言う。」】
もし、イスラエルの民が不信仰になり、神の命令を守らず、他の神々を拝むなら、神はイスラエルをさばくという警告です。そのさばきとは、イスラエルの民は約束の地から追い出されて捕囚の民となり、神殿は破壊されることです。その時イスラエルはすべての民の間で、物笑いの種になり、嘲りの的となります。異邦人は、イスラエルが主を捨てて他の神々に頼ったので、主は彼らをさばかれたと言うのです。この警告はやがて現実となりました。イスラエルの民は神に背いた結果、神のさばきを受け、バビロン軍がエルサレムを攻撃し、神殿は破壊され、民はバビロン捕囚となって連れて行かれました。
第 1 の点で覚えたいことは、信仰の重要性です。確かにソロモンは神への信仰によって神殿を建てました。そして神も神殿を喜び、ご自分の名を置く神殿を聖別されました。神は、神殿に向かって祈られる祈りを聞き、ささげる献げ物を受け入れて、民の罪を赦してくださいます。その上で、もっと大切なのはソロモンはじめイスラエルの民の信仰です。神が見られるのは、建物の神殿やそこで行われる儀式ではなく、彼らの信仰です。全き心と正直さをもって神の御前に歩んでいるか、神のことばに従って生きているかが何よりも大切なのです。その信仰があいまいになれば、神殿の祈りや儀式が行われても、心は神から離れ、やがて偶像礼拝に陥ってしまうのです。ソロモンの後半の生涯を見ると、まさにそのようになってしまいました。
神は同じように私たちの心を見ておられます。もちろん、神は私たちが信仰によって建てた教会堂も、教会の様々な備品も、目に見える奉仕も献金も喜んでくださり、それを聖別して、神の働きのために用いてくださいます。しかし、もっと大切なのは私たちの心の在り方です。全き心と正直さを持って神の前に歩み、神の教えに従って生きる信仰がまず大切なのです。そこからずれていけば、信仰生活は形式化し、生ぬるくなり、初めの愛から離れていきます。「人はうわべを見るが、主は心を見る」と聖書は言います。神は目に見える物よりも何よりも、私たちの心を見られ、全き心で主に信頼し、主に従い、主に仕えているかを見ておられます。全き心をもって神に従う信仰を持つ時、目に見える物も神の働きのために用いられることを覚えましょう。
2. ガリラヤの町　10－14
10-14【10 ソロモンが主の宮と王宮との二つの家を二十年かけて建て終えたとき、11 ツロの王ヒラムが、ソロモンの要請に応じて、杉の木材、もみの木材、および金を用立てたので、ソロモン王はガリラヤ地方の二十の町をヒラムに与えた。12 ヒラムはツロからやって来て、ソロモンが彼に与えた町々を見たが、彼はそれらが気に入らなかった。13 彼は、「兄弟よ。あなたが私に下さったこの町々は、いったい何ですか」と言った。そのため、これらの町々はカブルの地と呼ばれ、今日に至っている。14 ヒラムは王に金百二十タラントを贈っていた。】
ツロの王ヒラムは、ソロモンの神殿と宮殿建築のために、杉ともみの木材を惜しみなく与え、さらには金 120 タラント、約 4 トンを送りました。もちろんそれに対してソロモンは毎年の食料をヒラムに与えるというビジネスを行いました。けれども、ヒラムなしには神殿も宮殿も建てることができませんでした。そこで、工事完了後、ソロモンはヒラムにお礼として、ガリラヤ地方の 20 の町を与えました。ガリラヤはツロに面している地域なので、ヒラムは喜ぶと思ったのでしょう。ところが、ヒラムがその町々を見に行くと、それは受ける価値がないような場所だったのです。そこでヒラムはソロモンに「兄弟よ。あなたが私に下さったこの町々は、いったい何ですか」と言いました。そのためこれらの町はカブルの地と呼ばれました。カブルとは「ないのと同じ」という意味です。Ⅱ歴代誌 8:2 を見ると、ヒラムはこれらの町々を受け取らずにソロモンに返しました。ソロモンはそれらの町を建て直し、そこにイスラエル人を住まわせました。すなわち、それらのガリラヤの町々は建て直さなければ、人が住めないような場所だったのです。
第 2 の点では、ソロモンのヒラムに対する対応に目を留めてみましょう。ソロモンの対応にはいくつかの問題があります。まず、「ないのと同じ」と言われる地域をソロモンが贈り物として、長年貢献してくれたヒラムに与えたことです。ソロモンとしては、自分の

ほうが圧倒的に力があるので、これぐらいの贈り物でよいだろうと思ったのではないでしょうか。しかし、ヒラムはないのと同じというような贈り物を受け取りませんでした。ソロモンは心からの感謝の思いが欠けていました。もう一つの問題は、果たして神が与えた約束の地を異国人に与えて良いのかという、根本的な信仰の問題がありました。エルサレムから見ると、ガリラヤは田舎であまり価値はないとソロモンは思ったかもしれません。しかし、ガリラヤは神がイスラエルに約束の地として与えた土地です。ですからこれを贈り物として与えようとしたこと自体、ソロモンの信仰が正しい道からずれていたことを表しています。ソロモンはこの世の価値観で判断していたのです。しかし神は、ヒラムが気に食わず受け取らなかったことを用いて、摂理的にガリラヤの町々を守られました。

やがてソロモンから約千年後、このガリラヤ地方でイエスが伝道を始められます。その時もガリラヤは、異邦人のガリラヤと呼ばれ、ナザレから何の良いものが出るだろうと言われました。しかし、イエスはガリラヤで伝道を開始され、ガリラヤ全域を巡って宣教されました。

私たちも気を付けないと、この世の価値観で判断することによって、神のみこころからずれてしまう危険性があります。ローマ 12:2 にはこうあります。【この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。】心を新たにするためには、日々神の前に出て祈り、みことばをいただいて、神のみこころを教えていただくことが必要です。そうすれば、神が私たちを日々変えてくださり、神に喜ばれる良いことを選んで生きることができるようになるのです。この世の価値観ではなく、神のみこころにかなうことを行う者となりましょう。

3. この世の事業　15－28

15－28 はソロモンが行ったこの世の事業についてです。

15－17a【15 ソロモン王は役務者を徴用して次のような事業をした。彼は主の宮と自分の宮殿、ミロとエルサレムの城壁、ハツォルとメギドとゲゼルを築き直した。16 かつてエジプトの王ファラオは、上って来てゲゼルを攻め取り、これを火で焼き、この町に住んでいたカナン人を殺して、ソロモンの妻である自分の娘に結婚の贈り物としてこの町を与えた。17a ソロモンはこのゲゼルを築き直したのである。】ソロモンは神殿と宮殿建築後も、精力的に各地の町や城壁を築きました。ハツォルは北の町、メギドは中央の町、ゲゼルは南の町で、ともに南北の街道にある交通の要所です。ソロモンはこれらの町を要塞化しました。ハツォル、メギド、ゲゼルは今も遺跡が残っています。ゲゼルはファラオが占領し、ソロモンの妻である自分の娘に結婚の贈り物として贈った町でした。

17b-24【17b また、下ベテ・ホロン、18 バアラテ、この地の荒野にあるタデモル、19 ソロモンの所有するすべての倉庫の町々、戦車のための町々、騎兵のための町々、またソロモンがエルサレム、レバノン、および彼の全領地に建てたいと切に願っていたものを建てた。20 イスラエル人ではない、アモリ人、ヒッタイト人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の生き残りの民すべて、21 すなわち、この地に残されていた人々、イスラエル人が聖絶できなかった人々の子孫を、ソロモンは強制労働に徴用した。今日に至るまで、そうである。22 しかし、ソロモンはイスラエル人を奴隷にはしなかった。彼らは戦士であり、彼の家来であり、隊長であり、補佐官であり、戦車隊や騎兵隊の長だったからである。23 ソロモンには工事の監督をする長が五百五十人いて、工事に携わる民を指揮していた。24 ファラオの娘が、ダビデの町から、ソロモンが彼女のために建てた家に上って来たとき、ソロモンはミロを建てた。】

ソロモンはさらに自分が建てたいと願った町々を建てました。ソロモンは、これらの事業を行うために、イスラエルが追い出せなかった異邦人を奴隷とし、強制労働させました。イスラエル人は奴隷にはならず、ソロモンの家来として働きました。イスラエル人もソロモンの治世には過酷な労働と重い税金が課せられていました。ソロモンは、だんだんと民の苦しみに気を留めることなく、自分の願う事業に邁進していきました。

25-28【25 ソロモンは、主のために築いた祭壇の上に、一年に三度、全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げ、それらとともに主の前で香をたいた。彼は神殿を完成させた。26 また、ソロモン王は、エドムの地の葦の海の岸辺にあるエイラトに近いエツヨン・ゲベルに船団を設けた。27 ヒラムはこの船団に、自分のしもべで海に詳しい水夫たちを、ソロモンのしもべたちと一緒に送り込んだ。28 彼らはオフィルへ行き、そこから四百二十タラントの金を取って、ソロモン王のもとに運んだ。】

ソロモンは年に三度、いけにえをささげて神を礼拝しました。年に三度とは、過越しの祭り、七週の祭り、すなわちペンテコステ、そして仮庵の祭りと考えられます。ソロモンはそれらの神が定めた特別な礼拝を守っていました。またイスラエルの一番南のアカバ湾に面するエツヨン・ゲベルに港を作り、船団を設けました。またヒラムは操船技術に優れていたツロの水夫たちを送り、ソロモンのしもべたちに操船技術を教え、共に船に乗り込みました。エツヨン・ゲベルからアカバ湾を経て紅海に出ることができ、海上交易が可能となりました。そしてアフリカ、アラビア、さらにはインドまで船で行き、様々な商品を輸入しました。ソロモンの栄華は陸上と海上の交易によって成り立ったのです。オフィルの正確な場所は分かっていないようですが、金の産地で 420 タラント、約 14 トンの金を輸入しました。ソロモンは豊富な金を用いて、様々な事業を行いました。

第 3 の点ではソロモンのこの世の事業の落とし穴についてです。ソロモンは王として、公共事業を行い、国を整備し、豊かにしました。19 節には、「ソロモンが建てたいと切に願っていたものを建てた」とあります。ソロモンは自分の夢をかなえることに夢中になりました。その反面、神が願っているものは何かという視点がいつの間にか後退していったのではないでしょうか。確かにソロモンは年三回の礼拝は欠かさず行いました。しかし、いつしかそれは形式的になり、神殿での礼拝より宮殿でのこの世の事業のほうに心移りし、やがて多くの妻とそばめを持ち、偶像礼拝を行うようになってしまいました。

私たちにとってもこの世の仕事をすることは良いことであり、それに励むことは良い証しとなります。一方で、この世の仕事が第一になり、神が第二となれば信仰的に問題です。自分が切に願うことを行うあまり、神が切に願っていることが何かを忘れ、やがて神の思いに無関心になれば、神のみこころにかなった生き方ではなくなってしまいます。教会福音讃美歌 380 番はこう歌われます。「この世の務めいとせわしく、人の声のみしげき時に、内なる宮に逃れゆきて、我は聞くなり主の御声を。昔主イエスの山に野辺に、人をば避けて聞き給いし、いとも尊き天つ御声、今なお響く我が心に。」イエスは日中多くの人に囲まれて働きましたが、朝早くまだ暗いうちに、一人山で祈り、父なる神に祈り、父なる神の願いを知って、それを行われました。私たちもこの世の務めに忙しい中で、しばし静まり、神との交わりを持ち、主の御声を聞いて、神が願われることを私の切なる願いとして、みこころを行う者となりましょう。